慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地域霊場における宗教と観光 : 篠栗新四国88ヵ所からみて
Sub Title	
Author	Lamotte, Charlotte
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2015
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.80 (2015.) ,p.91- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成26年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000080-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

————, 1980, *Le sens pratique*, Paris: Minuit.（＝1991，今村仁司・港道隆訳『実践感覚1』みすず書房.）
————, 1987, Choses dites, Paris: Minuit.（＝1991，石崎晴己訳『構造と実践――ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店.）
————, 1997, Raisons pratiques: sur la théorie de l'action, Paris: Seuil.（＝2007，加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳『実践理性――行動の理論について』藤原書店.）
Keck, Frédéric, 2000, "Une sociologie de l'amour est-elle possible?: Réflexion sur les sociologies de Luc Boltanski et d'Auguste Comte," Jean-Noël Dumont eds., *Le don: Théologie, philosophie, psychologie, sociologie*, Paris: Le College Superieur, 159–174.
Lévi-Strauss, Claude, 1968, "Introduction à l'oeuvre de Marcel Mauss," Marcel Mauss, *Sociologie et l'anthropologie*, Paris: Presses Universitaires de France.（＝1973, 有地享・伊藤昌司・山口俊夫訳「マルセル・モース論文集への序文」『社会学と人類学』弘文堂.）
Lindberg, Carter, 2008, *Love: A Brief History Through Western Christianity*, Oxford: Blackwell.（＝佐々木勝彦・濱崎雅孝訳『愛の思想史』教文館.）
Mauss, Marcel, 1960, "Essai sur le don: forme et raison de l'échange dans les sociétés primitives," Sociologie et anthropologie, Paris: PUF.（＝2009，吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』筑摩書房.）
Wacquant, Loïc J. D., 1992, "Toward a Social Praxeology: The Structure and Logic of Bourdieu's Sociology." *An Invitation to Reflexive Sociology*, Chicago: University of Chicago Press, 1–60.（＝2007，水島和則訳「社会的実践の理論（プラクシオロジー）に向けて――ブルデュー社会学の構造と論理」『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店，15–94.）

地域霊場における宗教と観光
――篠栗新四国88ヵ所からみて――

ラモット・シャールロット

1．研究の目的と背景

本研究の主題となる篠栗町は，日本における都市と郊外，都会と田舎のあり方，あるいは現代における宗教的なるものを考えるための見本となる事例である。正しい，篠栗の特徴はその宗教的風景にある。篠栗町には九州北部でよく知られている四国遍路写し霊場があり，札所八十八ケ所が町内に点在しているだけでなく，240の寺院が存在し，35を数える番外札所や12の神社がある。篠栗の八十八ヶ所の札所をめぐる巡礼には，現在でも毎年十数万に達する数多くの人々がきており，幅広い出身地の人々が加わって，様々な類型を示している。篠栗の新四国霊場は200年前の開設当時から現在に至るまで多様な変遷を見せてきたが，篠栗に集る巡礼の動きが，同町の社会的経済的な発展に大きな寄与をしてきたことは間違いない。

篠栗は本四国の「移し霊場」として，凝縮した「意味空間」を形成している。また，人々が暮らしを営む「里山空間」の中に八十八ケ所が点在し，日常と非日常性が連続性を帯びている。寺社や祠が至る所にありながらも，人々が暮らしている生活世界でもある。篠栗は多様な目的を持つ人々をひきつける「磁場」として作用すると言える。体験と信仰，修行と観光という二つの軸を想定してみると，修行と信仰に関わる「修験」，信仰と観光に関わる「巡礼」，観光と体験に関わる「ヒーリング」，体験と修行に関わる「体験修行」という四つの方向性を設定できる。「霊場空間」を舞台として，ウチとソトの交

流による様々な「コンタクト・ゾーンン」が形成され，多様な思想や実践がまじりあう異種混淆な展開があり，現代社会の特徴を示している。本研究では「信仰と観光の磁場としての篠栗」を，深く探求してみたいと考えている。

2.　先行研究の概観と本研究の位置づけ

最近になって増えている観光巡礼では，アイデンティティ探求が主体で，巡礼に近い「旅」のタイプを示す。楽しみを主とする観光というよりは内面の探求を含む「旅」である。カタリーナ・シュラム（Katharina Schramm），ジル・デュビシュ（Jill Dubisch），ポール・バス（Paul Basu）などによると，電大の巡礼の習慣では宗教の範囲を超えた現象も生じている。例えば，「聖なる旅」というよりは，「聖なる実体」と観念される土産物や遺物の収集を目的とする巡礼で，収集したものを「家の神棚」と呼ぶべき小さな箱に入れて置く。あるいは旅行ができない人の代わりに旅行すること（Basu 2004: 167）も起こっている。その根源にあるのは，アイデンティティの探求であり，潜在的で神秘的なものを探求する機能が見られるという。ガーナやスコットランドで祖先の足跡を訪ねたり，ベトナムの戦闘員がかつての敵国のアメリカに旅行することも含むという。バスによると，「ルーツの観光客」（Basu 2004: 152）は，彼らの活動を観光客と言う言葉で表現することを断る。彼らの「旅」には，観光とアイデンティティ探求の旅行が重なっている。以上，述べてきたように，要するに，巡礼の意味が広がってきているのであり，単なる宗教性を帯びた巡礼から，バーチャルな巡礼，そしてアイデンティティの探求，そして純粋な観光など多くの意味が含まれようになっている。従って，巡礼者，観光客，旅行者の分類は益々なくなっていく。

観光人類学の先駆者エリック・コーエン（Erik Cohen）は，コレマンが引用した類型学を検討している（Cohen 2004: 9）。それによると巡礼と旅行を概念として区別した場合，旅の理解の方向性が異なる。巡礼者は，社会的・文化的中心へ向かうのに対して，旅行客は反対の方向，つまり周縁に向かうという。観光はその中間でいずれの方向性も持つ。しかし，巡礼と観光と旅行の違いを設定するという見解は，現在では受け入れがたい。そして，急速に変化する現代，つまり「ポストモダン」の状況の中で観光は複雑化・多様化しており，巡礼を単独の独自の概念で扱うことは困難さを増している。巡礼者・観光客・旅行客のいずれもが「楽しさ」を求めているという見解は，巡礼研究者の大多数によって共有されている。また，いずれの立場にあっても，現地で土産を買ってくる習慣があり，帰宅後に配分するという共通性がある。

3.　巡礼と観光に関わる実践

・「お遍路さん」

遍路の人数は毎年20万人を超えるという。それでも1975年から遍路の人数が減ってきた。一番人気がある季節は弘法大師の縁日の3月21日前後の春である。徒歩で霊場を全て歩くとすれば，3日間かかり，車でも2日間はかかる。巡礼は「歩く宗教」なのに，現在ではマイクロバスや自分の車で巡るのがほとんどで，歩いて巡る人は少ない。それでも，歩いての札所巡りは「えらい」と言われる。衣装はそれぞれであるが，今も基本は金剛杖を持ち白衣を着て菅笠で参る。参拝の仕方はそれぞれで，各人が自分に合うやり方をする。

・「お接待」

接待とは巡礼者に対して食物や飲み物を提供したり，無料で宿泊させたりすることで，善行によって功徳を得ると考える。この習慣は四国や四国遍路の写し霊場以外では見られないもので，四国遍路や新四国霊場の特徴の一つと考えられる。篠栗においても，春と秋の巡礼の最盛期には，道沿いや札所で飲食物の「接待」を行う習慣が継続している。前田卓は，紀伊半島の接待講を検討して（前田1971: 234–248），接待という習慣の発展は弘法大師信仰に強く影響された四国で盛んであること，「同行二人」という言葉で表現されるような弘法大師と遍路の一体化の信仰に支えられていること，四国で難行苦行して巡る遍路に対しての同情や尊敬であること，無料宿泊の提供に積極性があること，観光に関わるような経済は存在しないこと，接待という習慣を正当化する設備は未発達であること，などを指摘している。

・「森林セラピー」

「森林セラピー」とは，篠栗の植物や札所を案内して，遍路道を通じて森の中に，寺院札所で，様々な活動を行う。札所ではお参りも行うのとになるので，篠栗の場合には，「森林セラピー」の内容は半分位が宗教性を帯びる。

活動の主体である「森林セラピーソサエテイ」は東京で2009年にNPO法人として成立された。「ドイツの自然療法」という基本観念を思想にして，「森の力」を浴びて「五感で心も体もリフレッシュをする」ヒーリング活動である。全国には53ヶ所の「セラピーロード」がある（例えば，奈良県吉野町と和歌山県高野山町でも活動している）。篠栗でも，役場のサポットを受けて，2010年にはじめた。50人の地元の人を募集して一年間位に植物・篠栗の環境にトレーニングされた。このトレーニングには，霊場会は重要な役割をしてきた。遍路道と札所，遍路の仕方から経までを教えて，宗教的なフォーメーションを導いた。案内者と呼ばれる人たちも，大体森林セラピーの活動をはじめてから遍路や修行をすることになった。動機は都会から離れたくて自然が多いところで「人生をリセット」などで，篠栗の発展に協力することだった，という。森林セラピーの活動に参加する人たちの動機は多くの場合では「ヒーリング」である。喪に服す人たち・精神病・人生の悩みを持って気分を直したいことで参加する人々は少なくない。

・「体験遍路」

篠栗町役場や霊場会が組織して，篠栗の学校などで遍路をさせる活動も行われている。篠栗では霊場会の寺院の全ては自分たちだけの「遍路」を行っているが，寺院の信者・檀家・知り合いに限る活動になる。「体験遍路」というのは普段，お参りを全くしない一般人を対象とする。篠栗町の周りの学校・老人クラブなども「体験遍路」に参加する。「遍路」は篠栗町と隣の町の関係合いに重要な役割を果たしている。それは，「森林セラピー」などのような活動と同じく，昔の大きな遍路団体とは違っている。札所の堂守の語りでは「昔の遍路」は，60人以上を集めて，長崎県・佐賀県・熊本県・鹿児島県・山口県などの地域から鉄道でやって来ていたが，現在では，マイクロバスに乗れる小さな団体が普通になった。こういう形で札所参りをする人たちは，多くの場合には，友達か知り合いの誘いというきっかけとなって，一つの札所で座禅や滝行などを「体験」したうえで，「気持ちがよかった」という理由で続いてくるようになることも多い。

遍路はきちんと参詣して巡るという拝み方が減ってきて，「スタイル」（衣装）も変わってきた，とい

う。遍路は「自由なスタイル」,「登山かハイキングの格好をしている」と言われるようになった。一方では，子供や若者が増えてきたともいい，歩いて参る「歩き遍路」をする人たちも再び見られるようになった。ここには健康ブームの影響もみられるようだ。

4.　まとめ・考察

篠栗は本四国の「移し霊場」として，凝縮した「意味空間」を形成している。また，人々が暮らしを営む「里山空間」の中に八十八ケ所が点在し，日常と非日常性が連続性を帯びている。寺社や祠が至る所にありながらも，人々が暮らしている生活世界でもある。篠栗は多様な目的を持つ人々をひきつける「磁場」として作用すると言える。体験と信仰，修行と観光という二つの軸を想定してみると，修行と信仰に関わる「修験」，信仰と観光に関わる「巡礼」，観光と体験に関わる「ヒーリング」，体験と修行に関わる「体験遍路」という四つの方向性を設定できる。

「霊場空間」を舞台として，ウチとソトの交流を通による様々な「コンタクト・ゾーンン」が形成され，多様な思想や実践がまじりあう異種混淆な展開が現代社会の特徴である。こうした傾向は篠栗では南蔵院にも顕著にみられる。真正性や非真正性がまじりあい，明確に区別できない中で新たな創造力が発揮されている。「磁場としての篠栗」を，今後もさらに深く探求してみたいと考えている。

国家なきネーションとしてのスコットランドの
消費・再生産と独立の関係理解

髙　　橋　　誠

はじめに

2014年度大学院社会学研究科・博士課程学生研究支援プログラムの助成を受け，イギリスからの独立をめぐるスコットランド住民投票が実施された2014年9月18日をはさんで2014年9月15日から20日までスコットランドに滞在し，現地調査を行えたことに感謝したい。

1.　研究のねらい・方法

筆者は「スコットランドにおけるナショナル・アイデンティティの政治社会学的考察」(『法学政治学論究』第101号: 231–256に掲載）で，往々にして市民的（civic）ナショナリズムに分類される現代スコッティシュ・ナショナリズムの性格の再検討を行った。そこでは，政治指導者のスコットランド（人）理解と国民のそれとの乖離が存在することを明らかにし，現代スコティッシュ・ナショナリズムを単純に市民的ナショナリズムに分類することの危うさを論じたが，今回の現地調査では独立派の集会（特にグラスゴーのジョージ・スクエアで開かれた集会）に立ち会い，主に独立派のポスター，パンフレット，ステッカー，壁書きなどの観察から，(1）いかにスコットランド性が表象されているのか，(2）ナショナリズムの高まりの政治・社会的要因を探り，現代スコッティシュ・ナショナリズムの性格理解を深化させることを研究目的とした。